

冷酷無慈悲なラスボス王子は
モブの従者を逃がさない

CHARACTER



オパール

『花抱き』では主人公ポジションだった子爵令嬢。慈悲深く清楚な性格という設定のはずだが、ノワールの前に現れた彼女には当てはまらない。



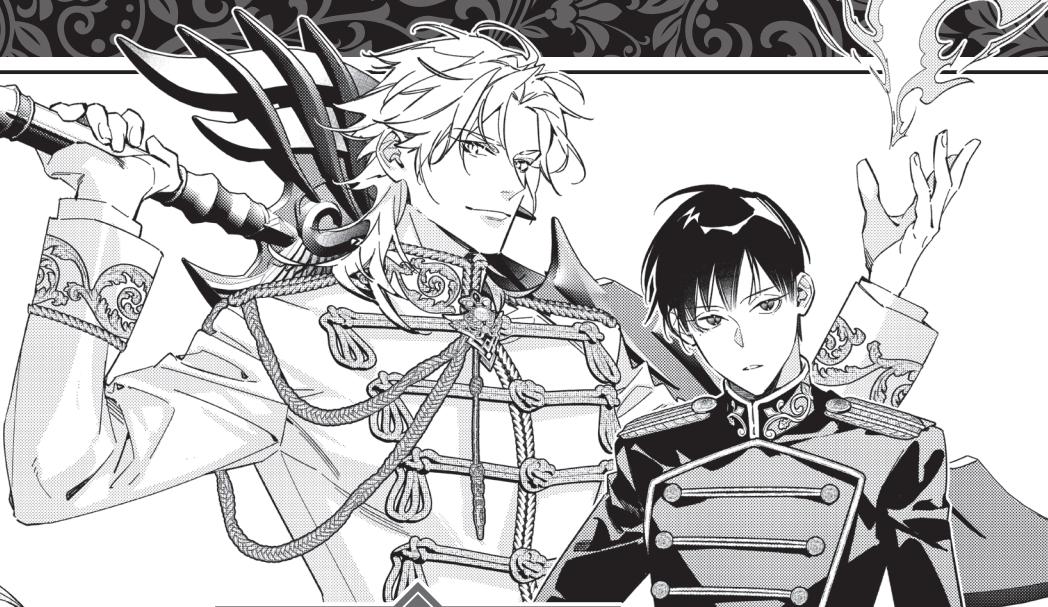
dain

伯爵家の子息で、ネロディアスの学友兼護衛。気安く爽やかで、強い者を尊敬するという単純な性格。普段はのんびりしているが、怒ると恐い。



アベーチエ

セベスティエン公爵家の次期当主で、ノワールの実弟。『花抱き』では攻略対象の一人。天真爛漫、好奇心旺盛な性格で、ノワールのことが大好き。



ネロディアス

ストラーレン王国の第二王子で、『花抱き』ではラスボスとして君臨する。ゲーム内ではとにかく冷酷無慈悲で愛を信じない男だったが、篠がノワールに転生したあとは愛を知り、ノワールを溺愛している。とにかく麗しく華やかで豪快な美形だが、生真面目な一面もある。



ノワール

乙女ゲーム『花びらを恋の数だけ抱きしめて』のモブ従者に転生してしまった元日本人、平田篠。クールな性格で何があっても動じない。

18歳でラスボス王子ことネロディアスに殺される運命なので、なんとか彼と距離をとろうといろいろ試したが、従者どころか婚約者にまでなってしまった。

ふと気がつくと、目の前に金髪の女の子がいた。

フリルやリボンがついている、どこかの高校の制服のようなものを着ている。でも紺色の制服はところどころ汚れたり破れたりしていて、彼女自身も傷を負って床に倒れこんでいた。

悲しそうな目をして、彼女は僕をみつめる。

「話を聞いてちょうどいい、ノワール。私はあなたの味方よ。ネロディアス王子を助けたいの」

少し垂れ目で、頼りなげな印象の少女は、青い瞳を潤ませる。

「聖女、あなたと話をしたあと殿下は変わってしまった。従者である私にまで冷たい目を向けるようになつて……の方になにをしたのです？」

僕が話したというよりは、夢の中でその場面を見ているような感覚だ。この言葉も自分が考えて話したのではなく、口が勝手に動いた感じ。

そして、聖女という言葉とこの場面に、僕は見覚えがあつた。でも、なんだつけ？

「ずっとあなたのそばにいる。どんなあなたも受け止める。そう言つただけよ」

ノワールと呼ばれた男の意識が、僕の中に入りこんできた。

そんなものは詭弁きべんだ。孤独なあの方に、そんな言葉は届かない。けれど、自暴自棄になつてすべてを壊したいと望んだあの方を救つてくれるのなら……

そこまで考えて、僕——いや私は、自分があの高貴な御方の忠実なる僕であり従者であるノワー
ルだと思い出した。私はあの御方に害成す聖女を、ここで食い止めているのだ。

だが、聖女の真摯な表情に、私の心は動かされる。

「……本当にネロディアス様を助けてくれるのか？」

清らかな心根だという聖女なら、本当にあの御方のすべてを受け入れてくれるのかもしれない。
そう思い、私は床に膝をついて、傷ついて立ち上がりがれずにいた彼女を助け起こす。

「やめてっ、私はネロディアス様のものよ。あなたの愛には応えられないわ」

すると突然、聖女がわけのわからないことを叫び、後ろに飛び退いた。

いきなりのこと驚いて目をみはつた直後。背中を熱杭ねつこうで貫かれたような猛烈な痛みを感じた。

目の前にいた聖女の顔に鮮血が飛び散る。

気づくと自分の腹から大剣が突き出ていて、あまりの激痛で、息ができない。咳きこみ、口から

も血を吐いた。私はギクシャクと後ろを振り返る。

背後に、少し赤味がかつたゴールドに輝く髪の男がいた。

私を、背中から大剣で刺した、その男。

白き肌に高い鼻梁びりょう。切れ長の目で私を見下ろす、その琥珀色こはくいろの瞳は烈火の怒りに燃えている。そ
れは私が従者を務めている、ネロディアス王子だった。

「主を差し置き聖女の誘惑に屈するとは、愚かな従者であるな」

「ネロディアス様、なぜ、私を……」

味方であるはずの王子に後ろから刺され、私は絶望のままにつぶやく。

「我に気安く話しかけるでないっ」

しかし彼は大剣を大きく振って、私の体を壁に打ち捨てた。その身に、壁に叩きつけられた衝撃
と、体を貫いていた剣が抜き取られる痛みが襲い掛かる。体に力が入らず、意識も朦朧として、な
にがなんだかわからない。

「ネロディアス様、彼がいきなり私のこと……怖かったわ」

涙ぐんで王子に駆け寄る聖女。王子は剣を持たぬ左手でドラマティックに彼女を熱く抱き止めた。
その展開が、まったく信じられなかつた。王子と聖女は敵対していたはずなのに、目の前の聖女
は王子と抱き合い、味方の私が無残に剣の餌食えじきになつてゐる。

なぜ？ なぜなのだ！

あれほど献身的に尽くしてきたというのに。私はネロディアス様のために生きてきたといふのに。

あなたのためなら、それがどのような悪行でも遂行してきたといふのに。

「聖女よ、あの者には魔法が効かぬ。我の妃ひになるのなら、あの者を剣で刺すべしとしたかさ
が欲しいものだな」

聖女には優しい声で話すのに、王子は私の名すら呼んでくれない。子供のときから王子のお世話を
をしてきたが、もしかしたら、たかが従者の私の名前など知らないのかもしれないな。

聖女の肩を抱き寄せる王子は、冷たく私を見下ろしてニヤリと嘲笑する。ちよづくひそ

「我から聖女をかすめ取ろうとしたようだが、そうはいかぬ。これからは聖女が我の女になる。裏切り者のおまえは、もう用なしだ」

死の間際に聞こえた、容赦のない言葉。

だけど、私は決して主を裏切つたりはしない。それだけは、お伝えしたかった。

もう少し生きられたのなら、誤解だと告げられたのに……

★★★★★

暖炉の薪たきぎがパチンとはぜて、私はその音にびくりと体を震わせた。絵本を見ながら寝ていたみたいだ。

私の名前はノワール・セベスティエン。四歳。だけど、夢を見たせいか唐突に自我が芽生えた。自我というか、昔の……前世である日本人だつたときの記憶を思い出したんだ。

私は平田篠ひらたつしのという名前の男性で、三十二歳だ。いや、だつた、か。

今いることは、日本ではない。そして、今いるこの世界に、日本はない。

そんな世界にいつの間にかいて、ノワールになつている。ということは、前世の自分は死んでしまつたのかな？ 病氣病気ではなかつたし、働きすぎるほど愛社精神もないから過労死でもない。いき

なり死んだようなので、おそらく事故だろう。

冷静に分析しているが、これでも結構慌てている。

先ほどの夢があまりにもリアルだったので、今も腹が裂けたかのように痛い気がするのだ。

ほんの少しのノワールの意識、そして前世の篠の膨大な意識が混ぜ合わされて、頭がぼんやりしている。四歳児の脳みそには、たぶんキヤパオーバーなんだな。前世で読んだ本の中に、よくそんな描写があつたなと思い出す。

とはいえ四歳児ノワールは、突然の出来事に泣いたり泣いたりすることもなく、篠の意識にぼんやりと寄り添っているのだ。君も大概だと思う。

それはともかく、情報収集をする。よくわからないことは、情報を集めて理解することが肝心だ。視線を上げると大きな暖炉があつた。煉瓦れんがで組んであつて、薪たきぎで火を起こす旧式タイプ。

日本には、こんな本格的な暖炉はあまりなかつた。憧れはあるが、あれは煤すすや灰の処理が大変だと聞いたことがある。

しかし、子供部屋にこれほど大きな暖炉があるということは、ノワールは良いところの子なのかもしない。そういうえば、前世では自分のことは僕わたくしだったが、ノワールは私と言ふようにしつけられている。貴族かな？ それはノワールにはわかっていないことみたいだな。

それよりも、先ほどの夢のほうが一大事だ。

剣が刺さった感触とか、聖女の顔とか、王子の声がやけに生々しかつたから、もしかしたらノワールの人生やり直しの展開のような気もする。

というかその前に、あの場面やセリフに見覚えや聞き覚えがあつた。

——夢の中で私を無残に殺したあの男は、もしかして冷酷無慈悲なラスボス王子なのでは??前世で妹がプレイしていた乙女ゲーム『花びらを恋の数だけ抱きしめて』通称『花抱き』というものがあるのだが、その中で出てくるラスボスがネロディアス王子という名だつた。そして、その従者はノワール……

夢で見たのは、ラスボス戦のひとつ手前の、主人公の聖女がラスボス王子の従者と対峙する場面。^{たいじ}ストーリーはいろいろなバリエーションがあるが、そのうちの逆ハーレムルートのセリフだつた。なんで妹がプレイしていたゲームの詳細を知っているかというと、『花抱き』ではレベル上げやゲーム要素の割合が多くて、それを手伝わされていたからだ。妹は恋愛シミュレーション部分ばかりして、地味なレベル上げは兄の私に丸投げだつた。したたかな妹である。

つまり、私がノワールであるなら、これはゲーム内転生なのだ。たぶん。そして『花抱き』の中でのノワールというキャラについてなのだが……聖女がゲームの終盤で戦うネロディアス王子の従者をしていて、主人公がどのルートを通つても味方であるラスボスに無残に殺される役回りだつた。

認めたくないことながら、どうやら私は『花抱き』の中のモブキャラ、ノワールに転生したようだ。

ノワールはゲームでバトルするときはかろうじて顔が出たが、普段ラスボス王子の従者をしているときは顔に目が描かれていないモブ従者である。

なぜ、そんなモブのノワールのことを私がこれほどまでに覚えているのかというと、魔法が全然通じなくて、ラスボスステージに進むのに毎回苦労させられたからだ。

かといって、所詮モブなので強いわけではない。このモブを排除しなければラスボス王子が出てこないのだが、その排除方法が毎回違つていて難儀だつたというだけ。

ノワールはただのクソキャラで捨てキャラ、そして死にキャラだつた。

つまり、そのノワールが私ならば、私の命は十八歳で散る運命。

「よりによって、なんでノワールなんだっ」

他の攻略対象だつたらゲームに巻きこまれないよう工作することもできるだろうに、ラスボス王子の従者はひとり、ノワールオニリーだ。ゲーム離脱は至難の業か?

自我が芽生えて数十分。苛酷な人生の結末を知って、途方に暮れる四歳児なのであつた。

「いやつ、まだ望みはある。私は四歳児なのだから、未来はどのようにも変えられるはず。結末はわかっているのだから、そうならないようにすればいいんだ」

夢の中でラスボス王子に睨まれた、あの憤怒の顔を思い出し、背筋を震わせる。

「とりあえず、ラスボス王子の従者にならないようにしよう」

情けない声でつぶやく私……けれど、もう少し生きられたのなら、と言つた死ぬ間際のノワールの切実な想いが胸を締めつける。

私は死亡回避に全力を尽くすと心に決めたのだった。

★★★★★

「ノノ兄い、早く代わつて。ぶつ刺されちゃう」

妹に言われ、僕は画面を見る。ちなみにノノ兄いは僕、しのに篠兄から変形した愛称だ。

この妹とのやり取りは、前世では日常だった。

妹は『花抱き』をプレイ中。机の上にある大きなモニターに映る場面は、聖女がノワールに向かって言い放つ言葉『まだ間に合うわ。今ならネロディアス王子を救えるのよ』を選択肢の中からチョイスしたところ。無難にハッピーエンドルート爆進中だ。

ゆえに『本当ですか？』

王子を救つてくださるのですね？』と言つて近づいてきたノワールを、短剣でグサリと刺す。聖女を操作する妹には、ノワールを救う気などない。その次のラスボス戦を

やる気満々だ。しかし戦闘モードが苦手な妹は、僕にコントローラーを投げて寄越した。

ノワールになった僕には、この場面は心臓が痛い。だが、前世の僕はすかさず聖女を後退させる操作をする。その手元の動きはよどみない。すぐにもノワールの腹から大剣が出てくるからだ。

事実、ノワールは背中から刺され、大剣が腹から突き出てくる。

後退したことにより、聖女は無傷だ。その彼女の目線が、腹を串刺しにされたノワールの背後に移る。そこにはラスボスであるネロディアス王子がいた。

ゴールドの髪が怒りを表すかのように、燃える炎みたいに描かれている。鋭い視線に高い鼻梁、

このゲームの中の誰よりも美形だが、人を人とも思わず屍しかばねを土足で踏みつけ、目に入る者はすべて傷つける、冷酷無慈悲なラスボス王子であつた。

詰襟タイプの黒い衣装を身にまとい、赤いマントをひるがえすサマは、いかにもラスボス。

赤みがかつた金髪がゆるくウエーブしている。とてもゴージャスなのだけど、毛量の多い髪が肩まで伸びていて、その様子がたてがみのように見えるから、僕は彼のことを『ライオンさん』と呼んでいた。妹には『ネロ様のイメージ壊れるからやめてっ』と不評だつたけど。

ネロディアス王子は冷たい目でこちら、いや、聖女を睥睨へいげいした。

目の前にはぐつさり状態のノワール。彼はノワールごと聖女を串刺しにしようとしたのだ。間一髪免れた聖女はネロディアス王子を見ておののく。

『味方を刺すなんて……あなたには人を愛する心がないのねっ』

そう言つて、聖女は聖なる光をネロディアス王子にかざそうとする。

いや、ノワールを刺した時点で、僕は聖女にも同じ言葉を返したい。

彼は大剣を軽々と振つて、串刺しにしたノワールを払い捨ててしまう。

『愛など、この世に存在しない』

壁にぶち当たつて、倒れゆくノワール。

以上。これが僕の、いや、ノワールの最後の姿パートツーである。

★★★★★

あ、本を読みながら、また寝ていたみたいだ。幼児の体はすぐに眠くなつて困るね。

四歳のときに前世の記憶を思い出し、私はいろいろと驚愕したわけだが、あれから二年が経つて今は六歳である。ノワールの私と篠の僕は良い感じに混ざり合い、互いが自分のように馴染んできた今日この頃だ。

しかしながら、今しがたのうたた寝で見た前世の夢。あれはゲームをする僕とゲーム上の私の姿だつたが、あのぐっさりにはなりたくないね。

ちなみに、さっきのはハッピーエンドルートだつた。

四歳のときに見た夢は、逆ハーレムルートであり、話の流れやセリフは若干異なる。『花抱き』は、主人公である聖女がどの選択肢を選ぶかで結末が変わるゲームだからだ。

しかし聖女がどのルートを選択しても、ノワールは死ぬ。

大体は、ラスボス王子が従者ごと聖女を殺そうとして、従者だけが死ぬパターン。しかしシチュエーションの違いはあれど、結局ノワールは死ぬのだ。

その、十八歳で死ぬ運命のノワールに転生してしまった私は、死亡を回避するため、この二年間は一生懸命勉強をした。文字の読み書きができるなど、何事もはじまらないからね。最悪、国から脱出することも考えて、どう転がつても良いように備えている最中だ。

その甲斐あつて、今は屋敷の書庫にあるどの本も読めるようになった。天井まで伸びるいつぱいの本棚には書籍がぎつしりで、前世で活字中毒だつた私としては嬉しい限りである。存分に知識を吸収することができた。

今はこの国、ストラーレン王国のことや、私の家のこと、町の様子や社会の仕組みなどを中心に調べている。本の知識はなんでも死亡回避の役に立つと思っていた。のだが……調べれば調べるほど、ノワールの現状はなかなかシビアなのだった。

この世界は魔力で満ちている。

ストラーレン王国は魔力量で人の優劣をつける魔力第一主義の国だ。

北方に位置した極寒の地にあり、一年のうち雪が積もつていらない期間が三ヶ月しかない。この寒い国では火属性魔法が尊ばれるが、それを駆使できるのは王族だけなんだ。

生活で使う火は、すべて王家から支給される。

町の中心に火が絶えることのないトーチがあり——本に書かれたその様子を見て、オリンピックの聖火のようだと思った——そこから火を分けてもらうスタイルらしい。

そこから取つた火種はそう簡単には消えない、と本に書いてある。

政治的側面を言うと、その火属性の王家を魔力量の大きい貴族が支えている。中でも国で二本指に入る魔力量保持者が公爵家を名乗ることができるのだ。

現公爵家はセベステイエン家、キリング家、シャルムント家。

『花抱き』の舞台は、ストラーレン王国の魔法学園なのだが、聖女の仲間になりえる主要攻略対象

キヤラの姓名が公爵家の名前と同じであった。

それを知ったときは、本当にがつかりしたな。ここが『花抱き』のゲーム内世界だということが残念ながらほぼ確定したからね。偶然同じ名前なのだと思ったかつた。でも死に際の夢も見ているからな、自分があのモブ従者であると認めて腹をくくるしかない。

都合の悪い状況から目をそらしていくつの間にかゲームのストーリーに巻きこまれるより、モブだと認めて回避するよう動くほうが建設的だ。

というか、私の生家はなんと、セベスティエン公爵家だった。

公爵家といえば、『花抱き』の中では有力な攻略対象候補になるはずの名家である。なのに、なぜノワールは悪役で、ラスボス王子の従者になるのか？

それには、ちゃんとからくりがある。

セベスティエン公爵家は水属性の名家で、代々青髪で豊富な魔力量を持つ子孫を生み出し、公爵家を三百年存続してきた実績があった。

しかし、その家の長男として生まれてきた私は、黒髪。しかも魔力なし。いっさい、ナシ。とてもショックだった。剣と魔法の異世界に転生したというのに、魔法が使えないなんて。

私がつかり具合もなかなかだつたが、母上の落胆は相当にひどかつたようだ。青髪家系で黒髪の私が生まれたことで不義を疑われたらしく、その元凶である私を母上はなかつたことにしたくらいいだからね。

物心ついたとき、いやその前から、私はセベスティエン公爵家の屋敷の奥のほうで隠されるよう

にして育てられた。一応、衣食住は充分にいただいていたが、外には出られなかつた。黒髪の長男の存在を、両親は世間にひた隠しにしていたわけだ。

私の面倒を見てくれたのは、乳母のモーラだけ。両親は奥に滅多に顔を出さないので、この一連の話はモーラに聞いた。最初は詳しい話をすることを渋つていたけれど、幼い私を放置する両親にモーラは思うところがあつたみたい。勉強してある程度この国の仕組みを知つた私に、涙ながらにそう教えてくれたのだつた。

それについて、つい最近、珍しく奥に来た父上に聞いてみたところ……

「黒髪で魔力なしのおまえが公爵家のの人間であると名乗ることはまかりならぬ。成人までは面倒を見てやる。だがその間、人目に触れてはならぬ。そして大人になつたら公爵家を出て、庶民としてひつそり暮らせ」なんてことを言われたのだつた。

六歳児に、そういうこと言う？まあ、前世の知識がある私には、意味はわかりますけど。

つまり、ゲームのノワールは公爵子息だけど魔力がないので親に見放され、グレちゃつたんだろうね。それで道を外れた者同士が徒党を組んで、ラスボス王子とその従者になつたのだろう。

まあ、ほほほほ憶測だけど、辻褄は合う。

それにラスボスは第二王子なのだけど、王家の者の従者になるにはそれなりの家格がいるから、そういう点でもあり得る話だ。

普通は公爵子息といったら、従者ではなく王子のご学友になるものなんだけどな。あ、魔力がないから、ご学友になれなかつたんだ。『花抱き』の舞台は魔法学園だけど、魔力が

ないから学園には入れず、王子のご学友にもなれなかつた、つてこと？

設定、細かい。凝りすぎじゃないか？

それはともかく、ストラーレン王国の現在の王様はマルティネス様。王様はゲームの中に出でこないので答え合わせはできないが、第一王子はウエルナンド様、第二王子がネロディアス様、このふたりは確実にゲームに出てくる。

そして私が従者になるラスボス予定の人物は、第二王子のネロディアス様。

普通の生活の中でどのようにゲームが進行していくのか、それはわからない。もしかしたらゲームと関係なく暮らしていくのかもしれないが、ここまでゲーム色が濃厚だと、なにも起きないというほうがあり得ないような気がする。

私は妹のゲーム攻略に何度も力を貸したけど、それは聖女が幸せになる物語であつて、ノワールを救出したことなど一度もない。つまり、対ノワールの攻略法などないのだ。

とりあえず、死亡回避のためにラスボス王子に会わないようにする。これは絶対だ。

「兄上え、またご本をよんではいるの？」

高い場所にある小さな窓からしか明かりが入らない、薄暗い書庫の中に弟が入ってきた。幼児特有の愛らしい声でそう聞いたのは、アベーチエ・セベスティエン、五歳。私よりひとつ年下だ。

そして『花抱き』において、攻略対象有力候補のひとりでもある。

攻略対象は、主人公である聖女が魔法学園の生徒百名の中から四人をチョイスする。

なので、アベーチエが絶対選ばれるとは限らないが、強いパーティを組むのなら公爵子息で魔

力量の多い、つまり強キャラの素質があつてラスボス戦で有利になるアベーチエが選ばれる確率は高いのだ。水属性のアベーチエは火属性のラスボス王子と互角に戦うので、妹などは真っ先に選んでいたキャラだつた。

しかし今、アベーチエはまだ五歳。聖女と色恋するなど考えもしないだろう、ほつぺがもつちりの可愛い弟である。

紺色の綿入りポンチョを身にまとい、黒タイツの上に厚地の半ズボンをはいている、北国仕様の子供服……いや、綿入りポンチョはストラーレン王国の民族衣装なのかもしれないな。よくは知らないが。

癖毛な青髪はフワワーンとして、瞳はサファイアのごとく濃い青色。うむ、しつかりセベスティエン公爵家の血を受け継いだ容姿である。そのことに満足し、私は弟の質問に答えた。

「私は本を読むのが好きなんだ。本の世界は自由だからね」

「兄上は奥に閉じこめられているから、ご本をよんでも自由をかんじているのですね？ おかわいそくな兄上ですうう」

「そう言つて抱きついてくるアベーチエ。いや、そこまで薄幸な感じではないよ、本当に本好きなだけだから。

「兄上、ぼく、またお熱が出そうなのです。またアレをやつてえ、やつてえ」

無邪気にギュウギュウと私の服を握つてくるから、私は読んでいた本をかたわらに置き、アベーチエをやんわり抱き締めた。そうすると、アベーチエの体からにじみ出でていた余分な魔力がシュー

ワツと私の中に吸収されていく。

この世界は魔力に満ちていて、優劣はあるが、ほとんどの者が魔法を使える。そんな中、私には魔力がない。魔法をまったく使えない。なのだが、人の魔力を吸い取つたり魔法を相殺^{さうさい}したりすることができた。いわゆる、魔法無効化というやつだ。

不思議な能力ではあるのだがこれは体質のようなもので、魔力を媒体にして作り出す魔法ではないらしい。なぜ私にそのようなことができるのかはわからない。

だが、わけのわからない力だから、父上や母上はおぞましい顔で私を見るのだろう。

魔法に重きを置くこの世界では、魔法を吸収する能力は異端なのだ。誰も理解しようとしないし、魔法に依存する者にとっては脅威でしかないのだろうね。

だから両親は、私のことなどなかつたことにしていいのだ。

まあ、それはともかく。ゲームでも、聖女の魔法はノワールに効かなくて、ゆえに攻略が難しかつたわけ。

「はあ、兄上ええ、いやされますうう」

まるで、お風呂に浸かって気持ち良いいと言ふかのごとく、アベーチエはそうつぶやいた。

アベーチエは時折熱を出す子だった。小さな体に膨大な魔力がおさまりきれず、魔力を制御できなくて体調を崩すらしい。これがひどくなると魔力暴走することもある。

前世風に言えば、知恵熱？ 自家中毒かな？

生まれつき魔力が多い子供を輩出する高位貴族の家の子に、よくある現象のようだ。

だが余った魔力を私が吸うことで、弟の熱はおさまった。私の能力は異端かもしれないけれど、こうして弟の役に立てるのであれば悪いばかりでもないな。

「アベーチエ、ちゃんと母上に言つてから奥に来たのかい？ 黙つてここに来たら母上に怒られてしまうよ」

「十分だけだって。もう、どうしてお熱が下がるのに兄上に会つたらダメなの？ 父上も母上も、もつと兄上を大事にするべきです。兄上はぼくの頭痛をなおしてくれるすごい人なのに」

鼻息をフンフンさせて、アベーチエはそう言うけど。

「国一番の魔力を誇る公爵家に、魔力なしが生まれるのはダメなんだつて。でもアベーチエが生まれてくれたから、私はとても嬉しいよ。どうか私の代わりに、公爵家を守り立てておくれ」

「そんなの、いやです。ぼくは兄上といつしょに、公爵家をもり……もりたでます。そして早く兄上を、この暗い奥から出してあげます。そしたらぼくとずっといつしょにいられますね？」

奥というのは、この書庫や私の子供部屋がある、公爵邸の北側の一一番奥のこと。いわゆる、生れたときから私が住んでいる居住スペースの通称だ。

奥には書庫の他に、倉庫とかパントリーとか、買ったものを置いておくような部屋がある。この区域にはモーラと一部の使用人しかやつてこない、おおよそ入室禁止エリアだ。

両親も、ほほやつてこない。熱っぽいときにアベーチエがやつてくるだけだ。

異端であり、容姿も公爵家の者とかけ離れている私は、誰にも会つてはならない。だからつい最までアベーチエにも会つたことがなかつた。

しかし半年前、ヤンチャな弟は探検と称してこの区域に入りこんできたのだ。今日のように書庫で私を発見したアーベルは、青い目を真ん丸にした。

「あなたはだあれ？」

屋敷に自分と同じくらいの子供がいて驚いたのだろう。

でも私は、モーラから弟がいることを事前に聞いていたし、ゲームの知識で、セバステイエン公爵家の子息はアーベルであると知っていた。妹のお気に当たるので、ゆえに、兄だと答えた。

「兄？ 兄上ええ？ ぼくに兄上がいたなんてええ」

驚愕して手でほっぺをおさえるアーベルだが、捜しに来た使用人にみつかって、すぐに本棟に連れ戻されたのだった。

そんな経緯があつたのだが、アーベルの頭を撫でたときに魔力を吸収された感覚がわかつたみたいで、すつごく気持ちが良かつたからまたやつてと言つて、たびたび私のところに来るようになってしまった。

母上は異端の力でアーベルの魔力を吸わるのがイヤみたいだけど、確かに熱は下がるし、アーベルが私と会いたがるので、渋々認めていた。

「もう十分は過ぎたのではない？ 母上がヤキモキしてアーベルの帰りを待つているよ。アーベルは公爵家の跡取り息子、母上にとつて大事な大事な子供なのだからね」

それに、母上の怒りがこちらに飛び火したらイヤなのである。

母上は私の存在 자체が許せないみたいだ。奥にはほぼやつてこない母上だけど、たまに怒りが湧き起ると奥に顔を出す。そのときは私に辛辣な言葉を浴びせてきた。

八つ当たりは困るんだよな。まあ、篤め大人対応で大抵はスルーしている。けれどそうは言つても、母上に刃^{やいば}のような言葉で切りつけられたら、私の心の中にある子供のノワールの部分がしくしくと痛むのだ。

私の言葉を聞くなり、アーベルは眉尻を下げた。

「兄上も、ぼくが大事？ また来てもいい？」

「もちろん、アーベルは私の大切な弟だよ。いつでも遊びにおいで」

微笑みかけて言うと、彼は笑顔を彈けさせる。

——無邪気で可愛い弟。父上も母上も、公爵家後継も、地位も財産も、愛も。私が持つべきものすべてを奪う、憎き弟。

ゲームの中のノワールは、そんなふうに思つて弟を恨んだかもしない。

でも私は、前世でもお兄ちゃんだったのだ。妹も弟もいて家族円満、なんの懸念もなかつた。だから、ゲームでは兄弟で戦う場面があつたが、弟に敵意を向ける気持ち、私にはわからないな。

弟妹^{てめい}というものは、無条件に可愛がるべき存在だと思つて。小さくて、どこもかしこも丸くて、たとえ成長して私の身長を追い越したとしても、可愛い以外の言葉はない。前世で弟に身長を越されたときちょっとだけ自分を不甲斐なく思つたけれど、弟が大きくなること自体は嬉しかったよ。

前世の弟も妹も、アベーチェも、無邪気に私を慕ってくれた。その様子を見れば、こちらも守つてあげたくなるものだ。

アベーチェは公爵子息で魔力量が多く、すぐに魔法を自在に操るようになるだろう。私などが守らなくても誰より強い水魔法使いになる。

けれど、小さいうちは私が守るよ。なにものからも、苦しい熱からも、転んで怪我したときも、抱きしめて優しくつぶんであげる。だつて、私はお兄ちゃんだからね。

まあ……ゲームの中のアベーチェは兄の私に容赦なく魔法をぶつ放してきたから、思うところはあるが、今は私にしがみついてくる甘えん坊な弟だ。

いつか、弟に魔法をぶつ放されるときがくるのかと思うと、悲しいけどね。

というか、私とアベーチェが兄弟だと知ったのは、こちらに転生したあとのことなのだ。

ゲームでノワールはモブだった。出自不詳ってやつ。もしかしたら、ゲーム内では私とアベーチェが兄弟という設定自体がなかったのかもしれない。つまり、ゲームでのアベーチェ対ノワールの場面は兄弟対決ではなかつた、のかな？

だから正直、ノワールの出自は意外だつたんだ。まさか、顔を出した直後に死ぬモブが、公爵子息だつたとはね。

そんな考えに耽つてゐる間に、アベーチェは笑顔で屋敷の本棟に戻つていった。私は彼を見送つたあと、読みかけの本を手に取り、再び読書を開始する。

六歳にして私が書庫の本を読みあさつてゐる理由は、もちろんラスボスの従者を回避するために

どんな知識をも身につけたいからだけど。もうひとつ、成人したら家を出ると父上に言われているからというのもある。

私は十八歳で死ぬ運命だけど、もしも死亡回避できたとしても、町に出てひとりで暮らさなければならぬ。その準備もある。

絶対に死ぬとは限らないからな。将来の備えとして知識のインプットは重要だ。

私……というか、篠は元々読書好きで、活字中毒気味だつた。本を読むのは苦ではない。どころかずっと本を読んでいられる。

書庫にこもつてひたすら本を読んでいい今の状況は、私には天国だつた。

公爵家の書庫にはいろんな書物がいっぱいあるが、魔術書の割合が多い。自分には魔力がないから実用的ではないけれど、どんな原理でどうなるとか、普通に読み物として面白いから敬遠しないで読んでいる。

たとえ面白くなくても、読みはじめたら最後まで読まないと気が済まないとタイプ。これぞ活字中毒者。前世でも、どんなジャンルの本も読んだ。特にミステリーが好きだつたのだけど、異世界に転生して役に立つのはミステリーよりもライトノベルだつたな。もつと読んでおけば良かった。妹のせいでゲームを極めた時期もあつたが、ゲーム一というほどのめりこんだわけではなく、比率としては読書八、ゲーム二くらいのもの。

あ、仕事の時間は別だ。篠は趣味が読書の、平凡な会社員つて感じ。

弟はスポーツマンで、本やゲームより体を動かすほうが得意だつたため、妹はゲームのレベル上

げ要員として私に白羽の矢を立てたわけなのだ。

しかしなんの因果か、今はそのゲームの世界の住人になってしまった。それが一番ミステリー。
ところで私は、屋敷の隅っこで隠れるようにして生きているのだが、このまま蟄居していられる
なら、ラスボス王子の従者にならずに済むのではないかと考えている。ネロディアス王子に会わな
ければ従者のなりようもなく、ゲームに巻きこまれることはないからな。

それに、書庫で暮らすのは大歓迎だ。いや、ちゃんとノワールの子供部屋はあるし、三食出る良
い暮らしだよ。むしろ三食昼寝付きで読書^{ざんまい}三昧だ。つまり文句なしなので、ラスボスにみつからな
いよう、このまま屋敷の奥に隠れていたいということ。

引きこもりと言うなけれ、私は両親の命令で奥にいるのだからね、たまたま利害が一致している
だけである。

というわけで、死亡回避するべく、まずはできる限り屋敷の奥でひつそり暮らすことを目標にし
た。とても地味な作戦だが、みつからないことが肝要だ。

篠として客観的に見たとき、この生活の中で子供のノワールに足りないものは、親の愛情くらい
なものだ。今の両親は私をいなものとして扱い、養っているけど放置しているからな。

しかし私には篠の記憶があり、前世では親に愛情をかけてもらつた。私の両親は前世の両親だけ
でいい。

まあ、アラサーの篠には、三百年もの長きにわたって脈々と受け継いできた公爵家を途絶えさせ
られない、という公爵家の体面とやらが少しはわかるんだ。でもそれでネグレクトは駄目だし、全

然擁護^{ようちご}はできない。

だけどそういう大人の事情はさて置いて、折檻や飯抜きさえなければ、大人の記憶を持つ私は
悠々自適気分で暮らしていくことだ。

ただ手も足もまだまだ小さく働くのは難しいので、もう少し育てていただければありがたいです。
穩便に、ゲームが終了する十八歳まで屋敷の奥で生活させてもらえたなら、とつと町に降りてひ
とりで生活しますので、お構いなく。という心情であった。

「あ、ひとりで暮らすなら料理もできたほうがいいな」

そう思い、私は読み終わった魔術書を棚に戻し、料理本を手に取るのだった。

★★★★★

粉雪がパラパラと降りかかる寒い日。

私は女装して馬車に乗りこみ、王宮へ向かっていた。

外で雪が降りしきつても、温かい部屋でぬくぬくと暮らしていた深窓のご令息だったとい
うに、いきなり外の冷氣を浴びる事態になり、頬が引きつっている。

「どうしてこうなった?」

ラスボス王子に会わないよう、屋敷の奥でひつそり暮らすことが私の目標であった。なのに、そ
んな私がなぜラスボス王子のテリトリーである王宮に向かっているのかというと……話は一時間前

にさかのぼる。

一時間前、私は子供部屋にて読書をしていた。暖炉に火があり、ぬくぬくである。

そこに、久しぶりに父上が姿を現し、開口一番言つたのだ。

「ノワール、急いでこのドレスを着るのだ」

あまりにも脈絡がなく面食らつたが、父上にはちゃんと理由があった。

父上が言うには、今日は第二王子のご学友候補を選ぶためのお茶会が王宮で開かれていて、そこに王子と同い年のアベーチエが招かれたらしい。ネロディアス様はあまり体調がよろしくなかつたようで、顔を青くしていた。そんな王子に、アベーチエが自慢げに言つたそ�だ。

「ぼくが具合が悪いときは、兄上が治してくれるのです」

父上はすぐにアベーチエの口を手でふさぎ、兄上のことを口にしてはいけないと注意した。しかし第二王子はしつかり聞いていて、目を光らせた。

「我も、その者にこの具合の悪さを治してもらいたい。公爵、頼む」

第二王子のみならず陛下にもお願いされた父上は、私の出自を隠すのを条件にして依頼を引き受けた……ということらしい。

「王宮では誰の目があるかわからないから、念のため女装をしておくのだ。おまえは公爵家の遠縁の娘という態だ」

公爵家に黒髪で魔力のない息子がいると知られてはならない。それで父上は私に紺色のドレスを

持つてきたというわけ。

口答えを許さない雰囲気に満ち満ちた父上の高圧的な態度が、私は苦手だ。なので、おとなしくドレスに袖を通したよ。しかし中身アラサーリーマンの條はドン引きである。

モーラが姿見を見せてくれたのだが、彼女が上手に着つけてくれたからか、鏡の中にはまあまあ可愛らしい少女がいた。

普段の私は黒髪ロングで、なにやらホラーっチックな日本人形の様相だ。横長の目つきに、生氣のない黒い瞳。モブゆえか、小さな口に主張のない鼻で、自分の顔ながら、簡素で陰気で不気味だと思つていた。

だがモーラのブラッシングにより、いつもより髪が艶やかになつて……まがまがしさが薄れた日本人形くらいにはなつたかな。

横髪は胸の前に垂らし、腰まで伸びていた後ろ髪はウエスト辺りで綺麗に切りそろえられた。耳の上辺りから頭頂部にかけて結わえて、髪飾りでとめている。前髪は目の上辺りで自然に横わけにしている。前髪ぱつんなど日本人形まつしぐらだから、それでいいです。

慌てて調達したらしいドレスは、胸の前にフリルがあつて、袖はふわりとしたフレアーモード、濃紺の落ち着いた色合いだ。スカート丈は膝下十センチ、この国では雪が積もつている日のほうが多いので、女性は裾を引きずるようなスカートははかない。スカートの下にパニエというボリュームを出すものをつけると、腰回りが温かく、スカートもふわりと広がる。

そして足には厚地のタイツをはいて、編み上げのロングブーツを着用するのが定番だ。

ドレスの上には白い毛皮のケープを羽織り、前をリボンで留める。

しかし六歳だから体が成長しきっていなくて、男の子なのに、ドレスを着ても違和感がないのが悲しい。自分の顔にあまり興味がなかつたから、そのときははじめて自分の顔を鏡でじっくり見たが、造作がちょっと女子っぽいかな？

目は吊り気味で細めだから愛くるしい系の女子ではないけど、白い肌にほつりと浮かぶ右目の下の泣き黒子^{ぼくろ}が目を引く。あ、まつ毛も長いな。それで女子っぽく見えるのかもしれない。

そんな経緯があつて、私は女装をして、ラスボス王子のところへ向かっている最中なのだった。ああ、できれば一生関わりたくなかつたのに、まさかアベーチェが余計なことを言うとはね。しかし家長の命令は絶対。働ける年齢になるまでは養つてもらうため、ラスボス王子のもとに向かわなければならない。

それにアベーチェを見ていると、魔力過多は相当気持ち悪そうだから、私を殺すだらうラスボス王子とはいえ放つておくのは可哀想だね。

特に王子に遺恨があるわけではないのだ。あれはゲーム上の話で、現状私が王子になにかをされたわけではないから。しかし殺される未来は遠慮したいので、チュッと吸つてサッと帰ろうと思つている。

馬車の車窓から通りがかりに見える一面真っ白な雪景色の美しさに目を奪われた。横に長くて大きい王宮の外観にも圧倒される。

私がこの異世界に転生して、屋敷の奥から出るのははじめてのことだつた。本から知識は得てい

たが写真などはなく、ストラーレン王国の町や人々や王宮の様子などは想像の域を出ない。なので、目に映る風景はどれも新鮮だ。

けれど、行く先は私を殺すラスボス王子のもとだから、心が浮き立つことはない。

馬車が止まり、一足先に降りた私が降車する父上を待つていて、ドーンという大きな物音が鳴り、少し離れたところで火柱^{ひばしら}が空に向かつて上がつた。

「お茶会が催されている場所の方角だ。アベーチェが従者とともにそこに残つてゐるのだ。早く行くぞ」

父上にうながされ、私はお茶会会場を目指す。しかし、父上は雪道を歩くことに慣れてゐるのだろうが、外出を許されなかつた私は雪に足を取られてしまう。石畳はある程度除雪されているのだが、ブーツが滑りそうで怖い。

そうしてギクシャク歩いていると、半泣きのアベーチェが駆け寄ってきた。

「父上え、大変です。お茶会が終わるところだつたのにい、王子がどつかーーんしちゃつたのぉ」

「あ、あ……」

兄上と言いたいのだろうが、それは内緒なので、口の前に人差し指を当てた。女装中に兄上呼びはご遠慮いただきたい。

アベーチエは手で口をおさえる。可愛い仕草で、私は思わずほっこりした。

とはいへ、緊急事態だ。私たちは急いで外から回り、お茶会会場のある部屋の庭へ向かつた。

31 冷酷無慈悲なラスボス王子はモブの従者を逃がさない

庭の真ん中に火柱^{ひばし}が立つていて、その中心に人がいた。

普通なら、人が火だるまになつてているのかと慌てるのだろうが、私はこういう場面を何度もゲーム上で見ている。

小さいけれど、間違いない。金の髪と白地の盛装が炎越しにオレンジ色に光つていて。炎の起こそ熱風に、豊かな髪が揺らめいていた。口をへの字に引き結び、子供でも威厳を保ち胸を張り、炎の中でするどい目つきをしている。

炎の中に立つてるのは、ラスボス王子こと、ストラーレン王国の第二王子ネロディアスだつた。王宮の庭に火柱^{ひばし}が上がり、大人たちが右往左往する中、私は迷わず彼に近寄つて行つた。彼を取り巻く魔力は、湧出する噴水のように間断なく噴きあがつていて。とてもではないが、小さな体では抱えきれない莫大な魔力量だと、ひと目でわかつた。

「危ないからこつちへ来るな。怪我をするぞ」

自分のほうこそつらく、どうにもならないのだろうに、王子は私の身を心配して声をかけてきた。ゲームでは冷酷無慈悲なラスボス王子だつたのに、優しいじやないか。

とはいえ彼が来るなど手を振ると、手のひらに乗つていた炎が私を目がけて飛んでくる。そこは配慮してもらいたいところだ。令嬢（仮）の顔に傷がつくだろうが。

でも私は魔法を相殺^{さうせき}できるので、大丈夫。炎のかたまりは私の体に到達する前に、砂がこぼれるかのようにさらさらと崩れた。

苦しいのか、王子が炎の中で呻き^{うめ}、頭を抱えてもがいている。目を見開いて、はあはあと苦しそ

うな息をつく。どうやら魔力暴走になりかけているようだ。

アベーチエは、ちょっと体の外に魔力があふれるだけでも、頭痛がすると言つて私のところへやつてくる。魔力過多はそれほどつらいものらしい。

アベーチエ以上に魔力があふれている今の状態でなにもしなければ、さぞかし苦しいことだろう。ゲームでは、ネロディアス王子は幼い頃に魔力暴走を起こし、数人死者を出した。それからは、ストラーレン王国一の魔力量の多さで本来なら敬われるべきところ、人殺しだと恐れられ忌避^{きひ}されてしまう。結果、自分を顧みない者たちをすべて焼き払いたいと憎悪を燃やす、惡の王子になるのだ。逆ハーレムルートで、王子が聖女にそのようなことを語つていた。

今日の前で起きているコレが、数人の死者を出すという魔力暴走事件かもしれない。

だが私は、これを止められるぞ。

苦しむ王子が雄叫びを上げると、火柱^{ひばし}が膨れ上がつて大きくなつた。彼がいる庭は熱風が吹き荒れ、私の長い黒髪やスカートを揺らす。庭には雪が積もつていたはずだが、とけてしまつたのか白い景色はまったくなく茶色い地面がむき出しになつていて。かるうじて常緑樹が庭の周りを緑で彩つっていた。ま、ブーツが滑らず、歩きやすいのは良いことだ。

というか、お茶会は室内で行われていたはずだが、こうして王子がひとりで庭にいるということは、おそらく被害を出さないよう配慮して庭に逃れてきたのだろう。賢明な判断だな。

だつたら王子の気遣いを無にしないよう、この場をおさめないとね。無論、死者も出さない。

「来るなど、言つていいのだつ」

王子はそう言うけど、構わずに歩を進める。でも炎のかたまりが飛んでくるのは、大丈夫だとわかつても怖いので、手で払いのけさせてもう。

私が手を振ると、魔法が弾かれるビィイインという音が辺りに響いた。弾かれた彼の魔法は分解し、私の手の先で霧散する。

分解した魔法の粉が私の周囲に渦巻く。王子の魔法の質が良いからか、それらは虹色の残滓となつて私の周りを輝かせた。

自分のあずかり知らぬところではあるが、まあ、綺麗は綺麗だ。

王子のすぐそばにやつてきた私は、ためらうことなく火柱の中へ手を突つこんだ。魔法を無効化しているから熱くはない。そして王子の手を握ると、私は警戒されないよう、王子に微笑みながら言つた。

「御機嫌よう、王子。御無礼いたします、ゆつくりお休みください」

そう言つているうちから、王子の魔力を吸い上げた。

魔法ではないので、私は普通にしていても魔力が周りにあれば吸つてしまふ。意識して吸うといふのは、ジュースをストローで飲むように、あえて吸引する感じだ。

すると、ドゥウウウルルンッ、というなにやら軽快な音が聞こえた……ような気がした。あれだよ、ゲームで武器を買うと、たまつたお金が減っていく、あのときの効果音のやつ。もしかして、王子のマジックポイント消費音なのかな？

火柱は魔力を吸いこむごとに徐々に小さくなつていき、王子の魔力をある程度吸い取つたところ

で、私は王子の手を離す。でも王子は気を失つて倒れになつたので、私はぐつたりした王子を慌てて抱きとめた。地面に倒れたら、白いお衣装が泥だらけになつてしまふ。

王族のキラキラ衣装など、私は弁償できないからなつ。

その頃には辺りはすっかり元の静寂が戻つていて、父上が駆け寄つてきた。

「どうなつた？ 王子は無事なのか？」

氣絶する王子を私から引き取つて、父上は聞いてくる。王子の心配しかしないのが、父上という感じです。思わず、苦笑。というか、冷笑。

そんな冷めた気持ちで、私は父上の腕の中にいる王子を見やる。

彼は子供だけど、しつかりラスボス王子であつた。

あれだけの炎を体にまとわせても、怪我ひとつない。それは多大な魔法を行使しても、己になんのダメージも及ぼさないほどの魔力がある証だつた。

魔法を発動する者は、無意識に体を魔力でコーティングするらしい。だから、手の上に炎を出しても、氷の槍を素手で握つても、痛くも痒くもないのだ。そう、魔法書に書いてあつた。

しかし制御不能の魔法は、別。己の身を焼くこともある。

だけど王子は無傷で、麗しのかんばせも健在だつた。さすがだな。

魔法を閉じていてもその目元は凜々しく、まつ毛は長い。スッと通つた鼻筋、桜色の唇。ゲームで一番美貌の男、聖女を差し置いて美しい男なだけある。

「魔力を吸い取つただけです。膨大な魔力を短時間で吸引したので、体がついていけずに眠つてい

るのでしょうか。でも、魔力が回復すれば目を覚しますよ。アーベー・チエもそうなので、大丈夫だと思います」

「そうなのか？」

父上はアーベー・チエに尋ね、彼はうなずく。

「兄上に癒されると、気持ちが良くなつてお昼寝します。目覚めはすつきりさっぱりです」

ここら辺は誰にも聞かれないように、こつそり親子で話していた。

「それよりも兄上、とつてもきれいでしたあ、炎のオレンジが兄上の白いはだにはんしゃして、キラキラでえ、兄上は目がギンツでえ、黒い髪がバサバサアでえ」

アーベー・チエの言うキラキラは、あの虹色に光ったやつだと思う。

「そうだね、私が魔法を構築する回路に触ると砂粒以下の大きさに分解してしまうわけだが、そのときあんなに綺麗な反応が出るなんてね。私もはじめて見たよ」

魔法というものは分子レベルの魔法陣のようなものが寄り集まつてできるというイメージだ。その魔法陣のようなもののことを、本では回路と表している。

私の魔法無効化は、その回路をバラバラにしてしまう感じ。

前世的に言えば、遺伝子の塩基配列を壊す感じ。わかりにくいかな？ まあ、意識してやつていいのではないかで、憶測だけだね。

すると、父上はまた驚愕した。

「なに？ 魔法を相殺したのははじめてだつたのか？ 王子が危ないではないか」

……父上は安定に、私を心配することはないのだった。いいです、いつものことなので。

「いえ、魔法の相殺^{（さうさい）}自体は何度か経験があります。あんなふうに光つたのがはじめてだということで……母上の魔法の暴発で水をかぶりそうになつたことがあります、相殺^{（さうさい）}してもそのときはこんなふうにはならなかつたのですよ」

「兄上、それは母上の嫌がらせでは……」

ぼそりと言うアーベー・チエの口を手で塞ぐ、父上だった。

あ、やっぱりそうだつた？ 母上は滅多に奥には来ないが、姿を見せるときは私に嫌味を言つてくることが多い。あの母上の魔法の暴発が、わざとだと嫌がらせだとかとは思わなかつたけれど、なにかしら私に難癖^{（なんくせ）}をつけたかったのかもなあとは思つていたよ。

それよりも、とにもかくにも王子の魔力暴走はおさえたわけなので、早々に引き上げたかった。『騒動をおさめた、あの謎の少女は誰だ？』と騒然とするお茶会会場で、気を失つた王子を従者に預けた父上は、私とアーベー・チエをソソッと馬車に乗せ、王宮をあとにした。

よつぽど黒髪の私が公爵家の者だと知られたくないのだね。

まあ、それはいい。王子が目覚める前に退却できれば、私はそれでいいのだ。

★★★★★

という、いつもの日常を過ごしていた。

縫物はモーラが貴族のたしなみだと言うから習つたが、それは令嬢限定なのではないかな？

しかし私は成人したら屋敷を出る身。腕が良ければ仕立屋で仕事をもらえるかもしれないから、とりあえず身につけられるものはなんでもやつてみるスタンスだ。

そんな静謐で穏やかな時が流れ、王宮での出来事を夢のように感じはじめていた、ある日のこと……

新しい青紫色のドレスを持った父上が、またまた子供部屋に現れた。このシチュエーションは一度目。こうして私の静謐は打ち破られたのである。

「ノワール、婚約が決まつたぞ。このドレスを着て王宮へ行くのだ」

開口一番そう言う父上をいぶかしんなどとは許してほしい。さっぱり意味がわからなかつたのだ。なぜなら私は、この屋敷から外へ出ではならない身なのだから。

さらに、私の婚約が決まつたとして、なぜ男の私がドレスを着る？

黒髪を三角巾で覆い白いエプロンを身につけている私は、パン作りの最中だつた。ひとまとまりになつたパン生地を銀色のボウルにビツタنبিতানぶつけながら父上を見やる。

私は奥からは出られないが、モーラが部屋に材料を持つてきてくれるからパン作りができる。生地を練つて成形までしたら、モーラが厨房へ持つていき、焼いてもらうのだ。

これも独り立ちに向けての準備のひとつだ。

本を読んで独学でパン作りをマスターした私は、成人したらパン屋になりたいと本気で思いはじ

めている。前世の私は会社員だつたが、将来なにになりたいかと子供のときに聞かれたら、パン屋さんと答えていた。前世では競争が激しくて、とても店を持つような甲斐性も腕もなかつたが、この世界でなら小さなお店を持つことくらいできそじやないか？ 甘いかな。

ああ、甘いといえば、ケーキ屋も捨てがたい。なにせ前世は色とりどりの美味しいケーキがあつたからね。それを再現できたら売れると思うのだ。やつぱり甘いかな。

だがパン屋は一日置いておいて、私は大事なことを父上に尋ねずにはいられなかつた。

「父上、私は公爵子息であること隠して十八歳まで屋敷の奥深く、ひつそり暮らさなければならぬはずなのですが。なにゆえ婚約なのですか？」

「……第二王子のネロディアス様が、おまえと婚約したいと言つているのだ。王家の命令には逆らえまい。それに王家との婚約は公爵家のためになる、とてもありがたい御申し出だ。断るなど、愚の骨頂つ」

私の嫌味をさらりと流し、動じることもなく、父上はドレスをビラビラ振り回しながら言い切つた。公爵家第一主義の父上は、そのような答えを出したようだ。

私はパン生地の入つたボウルに濡れ布巾をかけ、暖炉のそばに置く。一次発酵である。そして三角巾とエプロンを外してモーラに渡し、父上に向き合つた。

ここは正念場だ。

身に余る光栄である王族との婚約……だが、断る！

冷静に心を落ちさせながら、私は父上との舌戦に挑んだ。

「なぜネロディアス様が私などに？」

「先日の件で、おまえを見始めたそうだ」

父上もドレスをモーラに渡し、私とともに食卓の椅子に腰かける。子供部屋に客人など来ないの
で、座つて話ができるのは食事用のテーブルしかない。

「どうか、やっぱりラスボス王子に目をつけられてしまつたか。死亡ルートしか見えない。

「それは、私のことを女性だと勘違いしているのでは？　あのとき私はドレスを着ていましたから、
女の子だと思つて婚約を申しこんだのではないでしようか」

「それは確認してないが、陛下は公爵家の第一子が男性のノワールだと知つている。届け出に嘘は
つけぬからな」

「陛下はご存じでも、ネロディアス様が私を女性と思いこんでいたらどうするのですか？　それを
黙つて婚約を進めたら、王家を騙したことになりますよ」

ちよつと強めに言つてみた。なんとしても婚約話など断らなければならない。ラスボス王子に閑
わりたくなくて、こちらも必死である。

背筋を伸ばすが、六歳児ゆえチヨンと椅子に座る私に、大の大人である父上は説得モードで身を
乗り出した。私がごねると思つていなかつたようだな。

「ノワール、王家と婚約ということは公爵家にとつて良い話なのだ。なんの取柄とりあえもないおまえが公
爵家に貢献できる最後の機会だぞ。喜んでお受けするべきことだ」

なぜに、ほほほほ放置されている私が喜んで公爵家に貢献すると思うのだろうか。公爵家に生ま

れたら公爵家のために尽力するものだと、父上は普通に思つてゐるようだ。

ゲームのノワールだつたら、不遇を強いる公爵家に恥をかかそうとして、婚約話を盛大にぶつ壊
すと思う。

……ふむ、それも一案だな。しかし私はそれほど好戦的ではないし、公爵家を敵に回したら読書
三昧さんまいの日々に終止符が打たれるかもしれない。それは私の思うところではないのだ。
でも婚約はしたくない。ラスボス王子に近寄つて、若死にしたくもない。

「第二王子はお世継ぎを望まないのでですか？　あれほど魔力量を誇る王子が子孫を残さないの
は、国の損失になるのではありませんか？」

畳みかけるように、父上に訴える。婚約したくないという感情論だつたら、家長の一喝で本決ま
りさせられるが、正論を述べる六歳の私に父上もたじたじだ。

そうだ。今、六歳の仮面をかぶることに意味はない。アラサー篠の処世術で、なんとしても、父
上を丸めこまなければならないのだつ！

「そこは王家の問題でわかりかねるが……この国では同性婚が認められている。貴族が男性の側室
を囲うことは珍しいことではない。それにお世継ぎは側室を迎へればよいのだ」

確かにこの国では同性婚も一夫多妻多夫も認められている。収入に応じて妻子の人数に制限はあ
り、養えないのに妻や夫を増やしてはならない、というのはあるが。

この国は雪に閉ざされ、外出もままならないことが多い。ゆえに、家の中での生活が重要視され、
家族の人数が多いと幸せも多いと認識されている。

この国の国史大系にはそのようなことが書かれてあつた。

ゲームの中に、逆ハーレムルートというものがある。逆ハーレム、いわゆる女性主人公が男性の攻略キャラ全員と仲良くなるもののなのだけれど、それは全員と結婚する展開なのだと思う。

ゲームでは、その結果までは描かれていなかつたけど、たぶんそう。

そしてこの国ではそれが可能だ。エロツト。

いや、エロゲーではなかつたよ。妹がやつていた全年齢向けの乙女ゲームだから。

なんて、いたいけな六歳男児の中で思うアラサーおつさんであつた。痛いね。

「貴族の婚約といふものは、家同士の契約だ。王子と婚約することで、おまえは王家と公爵家の橋渡し役の任を帯びるのだ。また、王子が国王となつた暁には國母となり、公爵家を優遇する。そのように動け」

つまり、黙つて公爵家の役に立てということだな？ 亂暴な話である。

しかし父上のこの様子では、同性の婚約者はイヤ、は通じなさそうだ。
「私の立場はどうなるのですか？ 王子の婚約者である黒髪の私が公爵子息だと、知られたくないのでしよう？」

今度は私を衆目にさらしたくないだろう、という方向で攻めてみた。

「そこは悩ましいところだ。しかし公爵家を継ぐ男子だからダメなのだ。嫁ぐ身である女子としてなら、魔力が少なく髪色が少しばかり違つても注視されないだろう」

ジト目になるのが自分でわかつた。まだ子供だからいいが、女装がいつまでも通用すると思わな

いでもらいたい。ガタイのいい男が女装していたら、それこそ公爵家の恥になりますよ。

なんならゲームのスチルでは、ノワールはラスボス王子より背が高かつた。ラスボス王子の後ろに、鼻と口しか描かれていらない簡素な顔の、背の高いやつが常に控えていたぞ。顔の全容が描かれたのは、終盤のバトルシーンだけだつたけどね。

とはいえ説得は難航を極めている。婚約が決まつたと言つて部屋に入ってきたのだ。もう約定を交わしちゃつたのかもしれない。

これは、王子のほうから手を引くように仕向けなければならぬかな。

父上は公爵家の益になることに貪欲だ。この家を自分の代で潰さないよう必死なのだ。

「婚約話を進めるのは、王子が私のことを女性だと勘違いしていないか、そこを確認してからにしてもらえませんか」

少しでも先延ばししたい、あわよくば性別誤認で今回の話はなかつたことに……という展開に持つていきたかつた。

とその時、部屋の扉がノックされ、執事が顔を出した。

「旦那様、ネロディアス殿下がお見えです。婚約者であるノワール様にお会いしたいと……」

ラスボス王子、きた——つ！

私はなるべく王子から離れたいのに、なんで王子から来ちゃうんだよお……

ああ、ゲームの強制力という名の大いなる気配をひしひしと感じる。死亡ルート確定案件だ。ライトノベルでよくそういう展開があつた。

いやいや、しかしひームではラスボス王子の従者だった。婚約者ではない。まだワンチャン死亡回避の可能性はある。婚約者ならもしかしたら……いやいや、無理だな。だつて冷酷無慈悲なラスボス王子なのだ、従者たるうが婚約者だらうが殺すときは殺すよ。

やつぱりムリゲーだ。

「ちようどいいから、おまえが王子の誤解を解け」

私は父上に手を引つ張られ、部屋から連れ出されてしまった。おそらく応接室に向かっているのだろう。長い廊下を歩きながら、私は父上に「善処します」と答えた。

今私は力のない子供だ。扶養年齢のうちは父上という権力には逆らえない。雨風をしのげて、温かい食事を食べ、知識を蓄えられる環境を与えられている。この楽園は手放せないっ！

しかし十八で死ぬのも嫌なので、そこからの脱出を図りつつ、現状維持を目指すのだ。

そして私たちは、本棟の応接室の前に来た。

執事が、おそらくモーラから手渡された黒のジャケットを私に着せ掛け、服装や髪型をサツと整えた。一国の王子に会うのだから、身だしなみは大切だ。

そうしてから、執事は応接室の扉を開ける。まず目に入るのは、大きくて凝った装飾のなされた暖炉だ。室内の広い空間がしっかりと暖められている。

王族を通すのだから、ここは屋敷の中で一番上等なサロンなのだろう。一枚絵のように庭の雪景色が望める大きなガラス窓がある。雪が多いストラーレン王国では珍しく、今日は晴れているので、明るい日差しが室内に射しこんでいた。

その窓から外を眺めている、小さな後ろ姿。

鮮やかなゴールドの髪色を見て、ドキリと胸が高鳴る。恋などという甘いものではなく、刺された腹が渋るような、死に直結したドキリだ。

王子は金糸で縁取りと刺繡ゆきをした白地の膝丈ジャケットに、黒のロングブーツ姿。たっぷりした波打つ髪が肩を覆っている。

後ろで手を組んで庭を見ていたが、私たちが入ってきたことに気づいて、こちらをゆっくり振り向いた。アベーチェと同じ年なので、五歳。ゆえに、頬にはまだ幼い丸みがある。しかしづつちりした目元から厳しい視線が放たれて、口は引き結んでいる。

五歳ながらも堂々として厳かな、まごうことなきラスボス王子がそこにいた。

「セバスティエン公爵、とつぜんの来訪で申し訳ない。陛下から婚約の話がことのつたと聞き、はやくあいさつしたくなつたのだ」

柔和な微笑みをたたえた王子は、頭を下げる父上に挨拶をした。

「それはありがたい御言葉。ノワールも喜んでおります。公爵家はいつでも殿下を歓迎いたしますよ。さあ、ソファのほうへどうぞ」

王子は上座にあるひとり掛けの椅子に座る。横にある複数人かけられるソファに、父上、私の順で腰かけた。

というわけで、婚約を回避するべく王子の説得、開始である。

振る舞われた紅茶をひと口飲み、王子は私に告げた。

「ノワール、とつぜんの話で驚いたであろうが、こころよく受け入れてくれて嬉しかったぞ」
いきなり名前を呼ばれ、私は息を呑んだ。

夢の中では名前を呼ばれなかつた。いや、私の名前など知らないような感じだつた。従者の命など取るに足らないという様子で、息を吸うような手軽さで私を殺したではないか。

とは思つたが、まだ五歳の王子には知る由もないことだな。

しかしながら、婚約をこころよく受けた覚えはない。視線を下に落としたまま、私は口を開いた。

「恐れながら、殿下。先日は無礼にもお手に勝手に触れましたこと、お詫び申し上げます」

婚約のことには受け答えがしつかりしているから、話は通じそうだな。

「私はとある事情で素性を隠しております。それで、殿下にお会いしたときはドレスを着用してい

たのですが……」
「ああ、そうであつたな。そなたは虹色の輝きをまとう、とてもきれいな令嬢であつた。そういうえ
ば今日は、ズボンを着用しているようだな？」

許しを得たので顔を上げると、王子は機嫌良さそうに微笑んでいた。

ゲームの中ほどトゲトゲした印象ではないが、ミニラスボスチックで、まだちよつと怖い。でも

五歳児の割には受け答えがしつかりしているから、話は通じそうだな。

「…………」

「ああ、そうであつたな。そなたは虹色の輝きをまとう、とてもきれいな令嬢であつた。そういうえ
ば今日は、ズボンを着用しているようだな？」

先ほどまでパン作りをしていたから普段着だ。でも腐つても公爵の子なので、普段着もそれなりに上等なものを身につけている。絹の白シャツに黒い長ズボン、ブーツを履いていて、そこに先ほど黒のジャケットを着せられた。ゆえに、今日は良いところの坊ちゃん風の出で立ちだ。

「はい、私は男ですので。なので、婚約の話は……」

すかさず婚約解消の流れを持って行こうとしたが、王子は話を途中で遮つた。

「もちろん、そなたが男児なのは承知しているぞ。婚約の話を陛下にしたときにも、そのことを言
われた。それでも婚約者として、そなたに一番身近にいてほしいと思つたのだ」

「なに？ 性別誤認はしていない？ てつきり、女だと思つて婚約を申しこんだと思つていたのに。
婚約解消は簡単だと思っていたが、出鼻をくじかれてしまつた。父上が横であからさまに安堵の
息をついているのが不快である。

先手をいなされ、私は焦りを感じた。だが、まだこれからだ。なんとしても、ラスボス王子との
関係をここで断ちたい。

「先日は殿下の魔力を制するため、なにやら派手なことになつてしまつましたが、殿下が先ほど
言つた虹色の輝きは殿下の魔法が分解されたものであり、私の力ではありません。私には魔力がな
いのです。王子のそばにいるには分不相応かと。なので、婚約の話は……」

「それがもう、すごいことではないか。我的魔力に屈しないのは、そなただけだ」

王子は笑顔で言う。しかし貼り付けたようなその笑みでは、心が読めない。

それに全然すごくなのに、王子に伝わつていなくて困惑する。どう説得すべきか悩むが、と

にかく押すのみだ。

「王子の魔力に屈しないなど、とんでもないことです。屈しないのではなく、ただ魔法が効かないだけなのですから。私が強いわけではない、むしろ弱い者なのです」

実際、剣といった魔法以外のもので攻撃されたら、たちまち死ぬ。ゆえに、まったく強くはない。だからそう言つたのだけど、私の言葉を聞くなり、笑顔だつた王子は急に口をへの字に引き結んだ。

「そなたは、我と婚約したくないのか？」やはり、我が呪われた第二王子だと知つてゐるのだな？」

うりゅゅゅゅううと、まなこを涙でにじませる王子。

そんなつ！あの冷酷無慈悲なラスボス王子の初手が、まさかの泣き落としだなんて!?

いや、しかし、さすがのラスボス王子も五歳児ゆえに致し方なし。

「殿下。私は殿下が呪いの王子というのは初耳で、それゆえに婚約したくないわけではないのです」

「では、我と婚約してくれるな？」

「それは……」

「婚約してくれないのであれば、ノワールは我が呪いの王子だから婚約したくないのだ、と思うことにするが？」

王子は涙目のままムウと再び唇を引き結んだ。

そんなあ、私は心無い噂で人を選ぶようなことはいたしません。あなたがラスボス王子で、将来

私を殺すから婚約したくないのだ。これは事実だから仕方がないでしょ。

とはいって、父上の前でラスボス云々を口にするわけにもいかないし、父上が厳しい目でこちらを見て、婚約を承諾しようと無言の圧力をかけてくるし。うう。

正論で押し切るのは自信があつたのだが、泣く子にはかなわない……か。

「殿下。婚約を承諾いたしますが、くれぐれも素性は内密にお願いします」

——第一回、王子説得バトル敗退。

押し切ることができず、私は婚約を受け入れたのだった。

だがとりあえず、ノワールが第二王子と婚約したと公に伝わらなければ、今後婚約解消にこぎつけても人に知られることなく、こつそり舞台から退場できるだろう。そう思つて、そこだけはしつかり念を押しておいた。

「ふうむ、よくわからぬが、父……いや、陛下からもそう言われているので、それについては守るぞ。美しい婚約者ができたとウェル兄上に自慢できないのは残念だがな」

王子は涙ぐませた目を瞬きひとつでリセットし、ひと息ついた様子で紅茶を優雅に飲んだ。
あ、もしかして演技だったのか！ 私から言質げんちを取るために？

婚約を受諾したとしても、呪いの第二王子だと知つたら婚約を取り消されるのではないかと王子は危惧して、いち早く屋敷に出向いたかも知れないね。呪いというのは初耳だが、たぶん王子の魔力量が多すぎることに関係していいるのだろうな。

だったら、婚約を渋つたことで傷ついたかも知れないね。呪いというのは初耳だが、たぶん王子

私は彼が悪逆の限りを尽くす美貌のラスボス王子になることを知っている。膨大な魔力量で、正攻法では誰もかなわない強キャラだ。バッドエンドでは王都を火の海に沈めてしまう。それほどの魔力を有しているのだ。

なので、呪いがどうとかは、今更まったく気にならない。

それよりも、あの自信と威厳に満ちあふれたラスボス王子になる男が、幼少期には泣き落としするような子供だったなんて、考えもしなかった。そこまでして私との婚約を望む、その理由はよくわからないが。

今回の敗因は、今の王子とラスボス王子のギャップに虚をつかれたから、だな。だが次こそは、王子を説得して婚約解消を成立させてみせる。

命がかかっているので、こちらも必死なのだ。

表面上はにこやかに、内面でそんなことを考えていると、王子が王宮に帰る時間になつた。お見送りするため、私は父上とともにエントランスへ出る。王族への礼儀として、当然外で見送るつもりだつた。

「外は雪が強くなつてきていて。寒いから見送りはここまででよい」

しかし王子はエントランスでそう言い、私の右手を両方の手で包んだ。

「この次は王宮に招待するぞ。来月、そなたと会える日を心待ちにしている」

王子は五歳児だから決まり文句を言つてただけなのかもしれないけど、こんな丁寧な挨拶を王子様にされたら、令嬢は嬉しがるのだろうなと思う。スマートかつ紳士的だ。

でも私はまだ怖い気持ちがあるから、返す笑みが引きつてしまふけど。

それよりも、手から王子の魔力が漏れている。この前の出来事から数日しか経っていないのに、もう魔力満タンなのか、と感嘆した。結構吸つたつもりだつたけど、この辺りはさすがラスボス王子というところだな。

なにも言われていないが、アベーチェだつたら頭痛がするつて大騒ぎするくらいの魔力漏れだから、この前のように氣絶しない程度にチュッと魔力を吸つてやつた。

するとそれに気づいたようで、王子はニコリと笑う。

「ありがとう。楽になつた」

ゲームの王子は、いつも厳しい表情をしているか、笑つても嘲笑ちようしゅうだつた。だから、険の取れた王子の顔というものを珍しい気持ちで見る。

まあ、この世界はリアルだし、生活をしていれば普通に笑いもするし、幼い子供なのだから無邪気な面もまだあるのだろう。

ならば。そもそも、彼がなにもかもが不快だと言わんばかりのラスボス王子にまだなつていないのでしたら、私が殺される未来も修正可能かもしれないな。いや、そうであれ。

とにかく婚約者になつてしまつたのだから、関係を築きながら死亡ルートを回避するしかない。王子は私に、そして父上にも会釈して、執事が開けた玄関を出ていった。馬車寄せにきらびやかな馬車が止まつていたから、すぐにそれに乗りこめただろう。

玄関扉が閉まり、王子の姿が見えなくなつてようやく、私はホッと安堵の息をついた。

「父上、これからはどうなるのですか？ 殿下は来月王宮にと言つていましたが」

「婚約したらどうなるのかわからず、父上に尋ねる。というか、男同士で婚約という事態がまつたくピンと来ていないのだ。

「婚約したら、月に一度顔を合わせて打ち解けるよう努めるものだ。互いの家族や兄弟とも仲を深め、家族ぐるみで親しむようにする」

「素性を隠す私はどのように振る舞えばよいのですか？」

「しばらくは公爵家の遠縁の令嬢として王宮に通い、王子と仲良くなれば良い。のちのちのことはもいれ考える」

行き当たりばったりな父上を、私はついジト目で見てしまう。そして、やはり私は女装を継続しなければならないようで、内心ため息をついた。

「王子とノワールが婚約だなんて、許せませんわ。公爵家と婚約をするというのならアベーチエでもいいのではなくてつ？」

とその時、上階につづく階段に紫色のドレスを身にまとう母上が現れ、私たちを見下ろして言った。外出しない壮年の女性はロングドレスを好むようで、母上も足元まで隠れるスカート姿だ。

父上は見事な青髪。そして父上とは従兄妹同士の母上も素敵な青髪だ。

青髪同士でなぜ黒髪が生まれてしまふのやら。文句は『花抱き』の公式に言つてもらいたい。「公爵家との縁組を希望しているのなら、もちろんアベーチエを推すが。王子の望みはノワールの能力なのだ。アベーチエは代わりにならぬ」

とりなすように父上は言うが、母上は強気でエントランスに声を響かせる。

「能力自當てなら、そんな子は王宮に売り渡してしまえばいいわ。使用人として手元に置けばいいのよ。その魔力なしの出来損ないを、公爵家人間として王家に嫁がせるなど認めません。公爵家の恥になるわ」

「曲がりなりにも私の息子だ、そのような不憫な真似はできぬ」

曲がりなりつて言葉は聞き捨てならないが、まあ一応、父上は反論してくれた。だが母上は、私をキッと睨んだ。

「ノワール、王子に見^{みそ}初められたからといって、いい気にならないでちようだい。王子の婚約者でも、奥から出でることは許しませんからね！」

鼻息荒くそう言い、母上は階段を登つて二階に行つてしまつた。

まあ、産んだ私の存在をなかつたことに対する母上だ、私は嫌われているのだろうね。私が黒髪なのはゲーム設定のせいだらうけど、母上がそんなことを知る由もないし。母上にとつて私は、ただただ不気味で目障りな者なのだろう。

今まで私は、十八歳になるまでは公爵家の奥でぬくぬく暮らしていくたらいなと思つていた。しかし母上の剣幕を見ると、それは難しそうだな。
魔法で水をぶっかけられそうになつたことがあるが……もしかしたら魔法で私を殺そうとしたこともあつたのかもしれない。首を絞められたらアウトだつたけど、自分で直に手を下すほどの勇気はなかつたのだろう。

だとすると、案外、ここで王子の婚約者になれたことは良かったのかもしれないな。さすがに母上も、王子の婚約者を害そとはしないだろうから。

うとましく思っていたとしても、我が子に殺意を向けるような母親であつてほしくはないのだけど、あそこまでの嫌悪を向けられたら最悪の展開も可能性のひとつとして考えておくべきだな。

前世でいつの間にか死んでしまった私の今世での目標は、寿命を全うすることだ。

目の前にラスボス王子という死の脅威が迫っているが、その前に母上に殺されたら目も当てられない。注意するに越したことはないな。

しかし、ラスボス王子の従者になる未来は想定していたけれど、まさか婚約者になるなんて考えてもみなかつた。

ゲームで婚約の話があつたかどうかは知らない。でもゲームのノワールは、こういうきつかけでラスボス王子の従者になつたのかもしれないな。推測だし、モブにそもそも設定などなかつたかもしれないけど、辻褄は合つている。

でも、だとしたらゲームのノワールは王子の魔力を吸つてあげなかつたのだろうか。王子が苦しんでいても、助けの手を伸ばさず放つておいたのかな？

そうでなければ、先ほど会つたあの王子が、生きることがつらく苦しいと恨みを募らせるラスボス王子にはならないよう気がする。

殺される運命である私は、王子に思うところはある。けれど、魔力暴走のようなつらい目にあってほしいなんて思わないし、治してあげられるものは治してあげたいと思う。

苦しいのはつらいから、手を差し伸べただけだ。

あ、死亡回避するのに、王子をラスボス王子にさせないつて手もあるな。彼がラスボス王子にならなかつたら、私は殺されないかもしれない……のではないか？

だけど、そんなことできるのか？ 今まで、死亡を回避するためにラスボス王子と出会わないことを目標にしていたけど、出会つてしまつた。あまつさえ従者を通り越し婚約者になつてしまつたから、目標を設定し直さなければならないな。

私が死なずに天寿を全うするためには、ラスボス王子との関係性をなくすことが肝心だ。まず目標その一、婚約解消するよう王子に働きかける。彼から離れられたら屋敷の奥にこもつて、もう外へは出ない。

そうなれたら最高だが、やはり計画というのはそろそろまくはいかないもの。

そのための代替として、目標その二。婚約解消ができないうちは、王子のラスボス化を回避する。王子がラスボスにならないようにするにはどうすればいいか、うーん、それはわからないが。とにかく魔力暴走するような事態を防げばいいだろう。人々から敬遠されなければ、孤独な王子にならないと思う。

よし、その方向で行こう。しかし、とにもかくにも、母上怖すぎ。

